

令和七年三月度
御報恩御講

まつの どのご へんじ
『松野殿御返事』

建治二年十二月九日 五十五歳

おんふみ い こ きょう たも もう のち たいてん
御文に云はく、此の經を持ち申して後、退転なく

じゅうによぜ じ が げ よ たてまつ だいもく とな もう そうろう ただ
十如是・自我偈を読み奉り、題目を唱へ申し候なり。但

しょうにん とな たま だいもく く どく われら とな もう
し聖人の唱へさせ給ふ題目の功德と、我等が唱へ申す

だいもく く どく いかほど たしょうそうろう さらに
題目の功德と、何程の多少候 べきやと云云。更

しょうれつ そうろう そ ゆえ ぐ しゃ たも
に勝劣あるべからず候。其の故は、愚者の持ちた

こがね ち しゃ たも こがね ぐ しゃ とも ひ ち しゃ
る金も智者の持ちたる金も、愚者の燃せる火も智者の

とも ひ そ さ べつ ただ こ きょう ころ そむ
燃せる火も、其の差別なきなり。但し此の經の心に背

とな そ さ べつあ
きて唱へば、其の差別有るべきなり。

(御書一〇四六頁一行目～一四行目)

■強調・確認■

末法において、法華經を修行する僧俗が留意していかなければならないこととして「十四誹謗」を犯さない点をあげ、僧侶として信徒として、心がけていくべき事などを諭された御法門である。

末法の僧俗が、夫々に正法を受持し仏道修行に励み、

折伏弘教に勤めていく中で、
十四誹謗をお互いに犯さない
こと、不惜身命の折伏を行じ
ていくこと、正法を持つ者が
お互いに相手を仏の如くに敬
い合っていく信行が大切であ
ること等、基本的かつ重要な
御金言と拝していくべきであ
る。

一、大聖人様の、一人の信徒に寄せられる深い御慈悲を拝すること。

一、原則としての平等を示されている。一切衆生に仏性があること、原則として平等ということである。

『法華經』は、女人成仏・悪人成仏・二乗成仏が明かされ、一切衆生の成仏という大原則が明らかにされた。成仏も原則として平等なのである。

ただし、この平等には「この経の心に背かない」という条件があって、自ずと差が生ずることを勉強した。

末法の衆生は、生命が濁り
機根が劣っている。五濁悪世
の衆生であるからこそ、その
衆生を救うために、最勝最尊
の大法が、御本仏宗祖日蓮大
聖人様によって建立されたの
である。

大聖人様と同じ功德の御題目を唱えることによって、

御本仏の大慈大悲に浴して、
即身成仏の大願を果たすこと
が出来ると確信すべきである。

その為には、拝読の御文に
も戒められている様に「法華
経の心に背かない」で、仏道
修行に精進していくことが肝
要である。

御本仏は、縁ある衆生に対して「一つの大きな因縁」によって御出現になり、究竟の法である「法華経」を説かれ、あらゆる衆生の成仏を解き明かされるところに眼目がある。これが「法華経の心」すなわち「仏の心」ということである。

一切衆生成仏のための仏種
を断ずる行為が「正法誹謗・
謗法」という行為である。自
らの仏種を断ずるのみならず、
他の衆生の仏種をも断ずること
が「仏の心に背く」こととな
るのであり、

それ故に謗法の罪は、世間法の罪よりもはるかに重いと知るべきである。（十四種類あると勉強した）

我々一人ひとりが特に注意いなければならないのが、第一番目の「憍慢（きょうまん）」である。

信心歴や教学力が進んでいく
と、自分は勝れてきていると
「おごりたかぶり」を生ずる
ものであり、それが人間とい
うものである。自分自身の誉
れや誇りは大事にしているが、
自己に対する過信や執着は全
く別物である。

自分の「我」に対する過信

や執着が慢心に繋がりに、不信
や怠けに繋がってしまうと注
意するべきである。謙虚に己
を見つめ、境涯を高めさせて
戴こうと講員同士が信行を磨
き合っていくことが「僧俗和
合・異体同心」となり、広布
への大きな前進に繋がると確
信して戴きたい。